

ア  
ジ  
ア  
時  
報  
一  
九  
七  
四  
年  
三  
月  
号

# 十全体制とは何であったか

— 反潮流と批孔尊秦 —

中 嶋 嶺 雄

(東京外語大助教授)



## ◇はじめに◇

十全大会以後の中国というのは、正直のところ非常にわからないことが多過ぎまして……、一本か二本論文を読めば、なにかわかったように思うんですが、たくさん論文を読めば読むほどわからなくなるわけです。現在の中国というのは、外交に関しては非常に問題点がはつきりしているんですが、こと内政に関する限り非常に不透明だ、ということがいえるわけです。そういう前提のもとで、きょうの報告は、大体五つくらいはの柱から成っております。まず第一に現在の中国の政治的潮流の問題。第二には鄧小平の復権。これは単に政治的に復活したということではなくて、最近確認されていますように、いわば彼自身ますます復権してきているということ、例の軍——人民解放軍の異動の問題。それから第三に、一体十全体制とは何であったかというような問

題。次に、それらの問題を買いて関連する孔子批判・始皇帝評價の問題を第四に取り上げまして、第五には結論めいたものをお話してみたい。

## ◇現在の中国の政治的潮流◇

十全大会以後の中国内政というのは本当に非常に不透明であるけれども、最近強調されていることは、反潮流の運動——潮流と反潮流という問題が出てくるわけです。しかも現象的にみると、いわば「第二の文革」ともみられるような動きがいくつかあるわけです。

それらのものを拾ってみると、まず昨年八月十日の「人民日報」に、「遼寧日報」編集部注釈つきの試験の問題がありまして、人が深く考えさせられる答案というものが掲載されたわけです。それが八月十六日の「人民日報」に、「反潮流の精神」とい

う論文の小さな囲み記事で出ています。この中で強調されていることは、こういういわば反逆を称えて、しかも毛沢東の新しい言葉を提起している。それは「反潮流はマルクス・レーニン主義の一つの原則である」という言葉がここに取り上げられているわけです。

これは、私もいろいろ調べていてあとで気がついたわけですが、かなり深い含蓄を持った記事ではないか。というのは、文化大革命のときも、一九六六年の八月五日に「司令部を砲撃せよ」という毛沢東のいわば新しい指示があつて、それからやがて文化大革命に移行していったわけです。文化大革命のときに「マルクス主義の道理はいくつかあるけれども、つきるところは造反有理である」という、あの有名な言葉がある。

こういうことを考えてみると、これはいわば文革がもたらした成果であるといわれている教育問題について実はもう一べん問題を提起したようなもので、たとえば、七二年三月四日の「人民日報」の北京大学教育革命組の報告、同じく北京大学教育革命組の七二年八月二十四日の報告などをみると、文革の精神で教育改革をやったところが実際に学力が低下してしまつた、と。これは外国語教育の例を取り上げているわけです。そうしますと、教育問題も、こういう、いわば脱文革的な意見——いってみれば「文革だけでやってみたところが、実際に英文法も知らない者がたくさん入ってきた。それでは困るんだ」というような脱文革の意見に對して、この「遼寧日報」に出た記事は、つまり教育の仕方が悪いので答案を白紙で出すのだというようなそういう潮流、それから今年に入ってまたカンニングの問題が出てくるようですけれど

も、そういう潮流があるのだ、ということを考えてみる必要があるんじゃないかと思うんです。これがまず第一に、あるいは現象的に「第二文革」といわれるような問題点の一つの特徴です。

第二には、これはあとでまたもう一べん改めて取り上げたいと思いますが、孔子批判・始皇帝評價の「批孔尊秦」というものが起こっているということです。

言うまでもなく、文化大革命も古（いにしえ）にかえって「海瑞罷官」から出てきた。それからこれもすでに取り上げられているように、歴史哲学の馮友蘭の自己批判があつた。これは文革初期の郭沫若の自己批判とも比べることができかも知れない。

四番目には、最近ベートルペンとか、シューベルトとか、こういう人達、つまり音楽に對しての批判がある。それは、いってみれば皇帝、貴族のためのブルジョア的な音楽である、という批判が起こっている。これも文革の初期にはほぼ同じような批判があつたわけだから、そういうふうに見えることができると思う。

五番目には、いわば「ソ修」に對する非常に激しい排外主義的な動きというものが文革の初期にあつたことは、ご承知の通りだが、最近のソ連大使館員のスパイ事件に對する中国の取上げ方というものをみても、かなりそういう文革初期を思わせるような状況ではないかと思う。

その問題と西沙群島の問題が実は関連するわけです。西沙群島の問題については、アジア調査会は非常にタイミングよく、入江啓四郎さんがすでに「アジア・クォーター」（第五巻第四号）に法的な問題をお書きになっておられる。私自身も大学で昨年暮れから、たまたま西沙群島、東沙群島、その他のことについて詳

しく學生に講義をしまして、これはソ連の海洋戦略、アジア戦略と結びつけて、中国をめぐる国際関係という講義の中でやっていたわけです。

たまたまあういことになりまして、しかも中国は非常に短期決戦的に問題を解決しようとしているわけです。ではなぜあいう短期決戦的な強硬手段に出たのかということは、私は明らかにその背景にソ連のアジアにおける海洋戦略——これは長引かせたいへんだ、あるいは国連に持っていったらたいへんだ、という認識があったのではないかと思う。

しかも興味深いことは、ことあの問題に関しましては、尖閣列島と同じように、北京も台湾政權もほぼ同じ立場に立っているわけでした、ハノイがどう反応するか、それから南ベトナムの解放戦線がどう反応するかみていましたが、どうもいわばノーコメントである、ということでした。これはあの問題をめぐっては、つまりこと領土になった場合には、イデオロギーとか、社会主義陣營の中の問題では片付かない問題があつて、歴史的にあそこに渦巻いていたと思う。

特にソ連が西沙群島に関して、パトロールをしたり、海路調査をやったりしているという情報は、私も得ておりましたし、ちょうどニュエの東方になって、ハイフォンに近しいところにある西沙群島というものは、そういう意味で実は大きな問題の焦点になりかけていたわけです。

これに対する中国の反応を内政問題と直接結びつけることはできないにしても、そういうかなり強硬な動きが出ていたということとです。

これらの一連の動きを、いわば反潮流運動、あるいは造反有理といわれる文革運動というものと比べたときに、やはりそこにか感ずることができるわけでした、文革と脱文革、あるいは反潮流と潮流という動きが、どうも中国内部に渦巻いているのではないかと、とうふうに感ぜざるを得ない。ただし、そういういわば文革的なものももう一度かつての文化大革命のような形で大きな運動になるかということになると、私はその点ではまだまだ懐疑的です。

#### ◇復権した鄧小平副首相◇

そういうような非常に流動的な中国の内政の中で、最近特徴的な問題が二つありました。一つは鄧小平の復権という問題があったらしいということ。それから軍の十大軍区——地方大軍区の大異動。

鄧小平の復権については、驚くことではないのですがやはり政治局員になったということがほぼ確認されているということとです。これは言うまでもなく、十全体制が早くも手直しされ始めています。十全体制がもう修正されざるを得なくなってきた、とうふうに考えるべきではないかと思う。このことが一体どういう意味をもたらすであろうか——私は、鄧小平の従来の政治的なキャリアからしても、いま大きな転換期にある中国の中で非常に注目すべき人事的な異動であり、鄧小平の復権であろう、とうふうにみざるを得ないわけです。

もしもそういうことがあったとするならば、昨年末あたりに中央委員会なり、政治局会議なり、あるいは拡大政治局会議なり、

あるいはかつての文革のような状況であるとするならば、中央工作会議というようなものが開かれたのかも知れない、という形でみられるわけです。そのことだけを評価していくと、中国の政治が非常に再編過程が進んでいて、全国人民代表大会がすぐに開かれてもいいんだということになるかも知れないが、どうもこの点は、そういう形でいけば建設的な方向だけに再編過程が進んでいるということにはとれないような動きがあるのではないか。まだまだ結論が出ていない。全人代については、中国自身も、これまで何回も「もう開く、もう開く」といつてきたし、日本でも「もう開く」ということをいつていたが、ついにいまままで開かれていないわけです。

そういう鄧小平の復権は、ある意味で、譚震林、ウランフ、李井泉、李葆華、共青の胡耀邦というようなかつての実権派の人達の復権を背景にしていることは言うまでもない。そういう復権の動きは、これがまたいま中国で大きく問題になっていまして、最近の孔子批判などの中でも、この復権——中国語では復辟と申しますけれども、復辟と反復辟の闘争ということがいわれている。

これは軍の中では、この間も確認されたように、楊勇なども依然として健在です。こういう人達はやっぱり復権した幹部です。それから陳再道とか、その他たくさんさんの復権組が軍の中にいる。

それからインテリをみてみると、矛盾が復活した。それから費通孝もとくに、復活いたしています。この費通孝の復活は一九五七年の反右派闘争のときに問題を提起して以来です。社会学者だから、北京大学にブルジョア科学である社会学講座を導入しようとしたということも彼の罪状になったし、なんと十五年ぶりの

復権ということにもなるわけです。

#### ◇人民解放軍の人事異動の意義◇

そういう復権の潮流が一方にあり、もう一つは非常に最近やっぱり人事的に躍進が著しい李徳生、あるいは王洪文に示されるような躍進の潮流というものがある。

そこで、李徳生の問題に関連して軍のことを若干みてみる必要があるわけです。一般に今回の軍の大異動、これは確かに考えてみると非常に大きな異動であったと思う。ご承知のように、中国には十の一般軍区と一つの直轄軍区がある。これは正式には中国語では「部隊」といつていまして、われわれが大軍区というのは中国語の部隊のことですが、非常に広い範囲を統治するわけです。しかも文革以来、中央集権的な問題が常に模索されたにもかかわらず、地方大軍区の司令というものはかなり地方に根を持っていたわけです。

そもそも、そういう中央に対する地方分権的な色彩については、かつて文革の最中に、党中央地方局が廃止されて、中央地方局の第一書記が持っていた大きな政治的な権限を剝奪したはずなんだが、実は各大軍区は——これは中国専門の方にはあえてご説明するまでもないわけですが——たとえば北京大軍区の場合には、北京衛戍区と天津警備区と、河北軍区、山西軍区、内モンゴル軍区まで含まれる、非常に広い範囲を持つわけですし、そこにおいて政治委員を同時に兼務します。しかも、中国の人民解放軍は伝統的に土着主義的な体質を持ち得るわけだし、中国徴兵法の土着主義的性格からもそういうえる。そういう性格があるところ

に、たとえば許世友は南京部隊になんと十九年も、陳錫聯も瀋陽に十四年間もいたことになりすし、楊得志、韓先楚、ともに十五年間もいままでのポストにいたわけです。しかも九全大会から林彪事件というあの激変にもかかわらず、これらの人達は依然として地方に蟠踞し得た、そういういわば強力な基盤を持っていた軍の指導者が大幅に異動をしたということです。これはやはり非常に画期的な問題でして、いわば党が軍を支配する体制が再確立したのだというふうに、一般的にはいわれていようです。

確かに、かつて文革のころは「人民解放軍に学べ」「人民解放軍は学校である」ということがさかんにいわれた。「軍こそ中国革命のあの革命の伝統を継承しているものだ」ということがいわれたんですが、最近はそのようになってはなくて、「党が軍を指導する」あるいは「一元の指導」ということがいわれていまして、軍に学べというのはいまに林彪一派の陰謀である、というようなことになっているわけです。

そういう変化の中で、それでは果たして今回の措置は党が軍を支配する体制をますます固めつつあるのかどうか、という問題です。実は私は素人なんです、その点では、果たしてそうみる事ができるかどうか、むしろ懐疑的です。その理由は、これら十九年、十五年、十四年と、ああいう人事異動の激しい中国において、これまで地方に蟠踞していた指導者とその地方を離れたという事は、確かに大きなできごとであり、ある意味では地方の基盤からはずされたということにもなり得るのですが、しかしながら瀋陽軍区の場合をみても、陳錫聯は、ご承知のように、北京に行つたわけです。北京大軍区というむしろもっと重要な地区に行

つた、というふうに考えることができる。それから許世友の場合も、広州というのは従来から非常にいろいろな問題があった。これは黄永勝以来の林彪事件にみられるような軍内部の問題としても問題だし、また中国にとっては南方の防衛が重要になってきているだけに、やはり広州大軍区は戦略的な拠点なのであり、許世友はそこに行つたわけです。そういうふうにとみると、これらの人達がいわば軍事的な影響力をそがれたというような見方をすることができるとか、そうではないような気がする。

一般的には、今回の軍の異動は言うまでもなく対ソ臨戦態勢に備える体制を着々と築いている、と言われているが。確かにそれは東北の瀋陽大軍区には李德生という、最近非常に躍進の著しい副主席が行っていることからしても、当然そういうことがいえるわけです。

ただ、それについて、軍が影響力を失つたというふうにいえるかどうか。私の見方はもう少し意地が悪いんですが、恐らく党中央、あるいは毛沢東は、こういう独立王国的な存在である陳錫聯なり、許世友は、やはりいろいろ気にかかった存在であったので、この際動かそう、というふうに考えたのではないか。しかしながらその結果、必ずしもそういう形で動かすことができずに任地の交替に終わったのではないか——という気がする。それが証拠には、今回の軍の異動はそれぞれの間にいろいろな異動があるが、地方軍区の指導者がだれも失脚していない。むしろ、たとえば北京大軍区のように、林彪時代のあの鄭維山司令以来空白であったところが埋められたところもある。

それから、これはのちほど問題にしたいんですが、孔子批判・

始皇帝禮贊の中で始皇帝の郡県制を非常に評価して、中央から官吏を派遣する郡県制によって中央集権体制をつくるのが大事なんだ、それが始皇帝のえらいところだ、ということをいうわけです。そうしますと、今回中央から官吏を派遣したのはまさに李徳生なんですね。李徳生をそういう形で瀋陽に送り込むことには成功したが、依然として軍の指導者達はいずれも影響力を持っているのではないかと思う。

私がそういうことを申し上げる前提は、陳錫聯にしても許世友にしても非林彪系の軍人であることは事実であって、彼らは林彪事件にも中立的であったと同時に、現在の潮流・反潮流の運動にもかなり中立的であって、その次の時代を見ている人々ではないか、というふうに考えるので、その点で問題はまだいろいろ残っているのではないかという気がします。

こういうふうに考えると、まだまだいまの中国をどういうふうにつかんだらいいのかが非常にわかり難いわけですし、なかなか的確な答えが与えられない。そこでもう一べん々十全体制とは一体何であったか、ということをふり返って問題をみる必要があるのではないかと思う。

### ◇十全体制とは一体何か◇

さきほど申し上げたように、鄧小平の復権、新たな昇進というもの、早くも十全体制の修正である、あるいは十全体制は九全体制と同じようにまたまたもう動かさざるを得なくなつたとするならば、やはり十全大会は多くの問題を持つていたわけです。これは言うまでもなく、私もこれまで二、三いろいろ書いてきまし

たように、あの十全大会そのものが非常に異例な大会であつたということ。しかも林彪の遺体を杖して、大会を挙げて批林整風運動の一大キャンペーンをやり、たいへんな儀式を行ったのですが、しかしながら政治報告をみましてもどうもすつきりしない、問題がどこにあるのか、非常に不透明な大会に終わった。

これは考えてみると、やはり大会自身がそういうものを持っていたのであって、暫定的にいろいろの問題を凍結したのではないか、というふうに思う。しかも現在の中国は一つには対ソ脅威という問題があるし、第二には現在の中国は対外関係を非常に広範に拡大してきているので外部世界に対してどう対応していくかという問題があるわけで、そういう外からの圧力なり介入に対して中国がどういうふうになを固め、耐えていくかという問題。三番目には、毛沢東、および周恩来、ともに高齢でして、ここで中国の中にこれ以上激変をもたらすことはなんとしても避けなければならぬという一つの理性がはたらくであろう——こういうものがいわば圧力になって、たまたま問題を凍結させ、バランスを保つたのが十全大会ではないかと思う。

しかも十全大会の主要な潮流というものは、いわば周恩来を中心とする行政官僚と、復活した鄧小平に代表されるような旧実権派と、それから非林彪系の軍首脳、こういうものがそれぞれ完全に一致していないながらも、一種の暫定的なコアリッションを形成した、そういう妥協的、調整的な大会が十全大会であつたのではないか、というふうに私は考えるんです。

そうであるがゆえに、十全大会というものでこういうものがすべて決着することができずに、この十全大会前後から孔子批判、

始皇帝評価ということが起こってきているわけでして、最近の孔子批判など、たとえば林彪批判を深めるということだけで考えればもちろんこういう形にはならないでしょうが。私はどうも問題はそれだけではないように思う。もしもそうであるならば、人民大衆から孤立した、一握りの反革命分子に過ぎない林彪を、なぜ孔子批判をこれほど大衆運動にまで高めてもう一べんやる必要があるかということにもなるわけで、やっぱりいろいろの問題が起こっている。

そのことはまさに周恩来自身が「二つの路線の闘いは依然として存在し、今後も十回、二十回、三十回と階級闘争が起こるであろう」、林彪批判があり得るであろう、ということをおっしゃっていることに現せられるのではないかと思う。それがたまたま私が申し上げたようないまの前提につながるのではないか、という気がするんです。

いずれにしても、十全大会自身に潮流と反潮流というものがあつたのではないか。かつてから私は、王洪文の報告の中の表現つまり、反潮流を鼓吹して「党からの免職や除名、入獄、殺害、離婚をおそれず反潮流の立場に立つべきだ」という意味の箇所、これは周恩来の報告にも若干ありますが、トーンが全然違います。そこには問題の芽を求めたんですけれども、どうもその後の孔子批判というのはこのへんにもつながってくるような気がします。それはもう一べんあとで申します。

そういう場合に、それでは十全大会において取り上げられた林彪事件そのものは一体何であったのか、という問題にどうしても突き当たらざるを得ません。最近の軍の異動であるとか、中国内

部のさまざまな——あとでまた申し上げます、孔子批判の中にできてくる非常に刺激的な言葉などをみると、やはり中国の内部には、林彪異変についてわれわれが疑問に思うと同じように、内容を知りたいという、いわば内部的な欲求が一部にあるらしい。これは香港情報なのであまりアテにならないかも知れないが、軍の中にも「林彪は無実である」という上申書を出した部隊があるというようなことがいわれていきますし、それから、「モンゴルのウンデルハンで墜落した」という公表された筋書に対して、それで納得できないという不満を持った人達がいる、というような情報の一部にあるわけです。これはあくまでも情報です。

確かに、考えてみると、あれほどの大問題でありながら、林彪事件というのは依然として不透明、不可解で、全く状況証拠さえもない。ただ中国の中で公表された筋書があるに過ぎないわけですから、当然こういう問題が渦巻いているような気がします。

そこで、林彪事件というのは、私の仮説からするならば、まさに毛沢東を暗殺しようとした林彪ではなくて、いわば体制の中の周恩来と林彪との対立だ、というふうに私は考えるわけです。なぜそういうふうにかかってくるかということをおっしゃると、それだけでかなりの時間がかかりますので、それは仮説として申し上げるだけにしておきます。

#### ◇孔子批判と始皇帝評価◇

そんなふうに考えてみると、どうも問題がすっきりしないのではないか。そこで四番目に、そういうすっきりしない問題を、今回の孔子批判において解くことができるかどうかということで、

孔子批判の問題に入っていくかと思う。ところがその孔子批判も、実は正直のところ、一、二の論文を読みますと「これだ」というふうにいるんですけれども、やっぱりまた「そうではない」というふうにもなつて、なかなかよくわからない。そこで最近の事実だけを少し申し上げてみたいと思う。

孔子批判運動と始皇帝評価の運動は、どうも最近は孔子批判よりも始皇帝評価の運動にウエートがおかれてきているような気がします。これが一つの最近の特徴ではないかと思う。

そこで一九六〇年代以降——つまり現在の問題に非常に密接につながるであろうと思われる、六〇年以降中国において始皇帝というものがどういふ形で問題になつたか、ということ調べてみた。これも非常に不十分な調査なのであとで補足していただきたいのですが……。

まず六〇年代の前半に、歴史的人物の再評価をめぐる歴史学界の論争があつた。ここに「歴史研究」を持ってきていますが、たとえばこの一九六四年三月の尚鉞という人の論文なんかをみてみますと、孔子、始皇帝、曹操、隋の煬帝、則天武后、海瑞、康熙など、これらの歴史上の人物をめぐる論争がいろいろあつて、この中でも始皇帝がかなり取り上げられているわけです。

しかしながら、この時期は、今日のように始皇帝をまさに「革命君主である」というふうにみるような見方はしていません。むしろ始皇帝の功罪二元論——一方において中央集権の國家をつつたと同時に、他方において非常にいわば野蛮な手段を用いて、この本にあるように「野獸的な、残酷な手段を用いて広範の人民大衆を擄取した」というような言葉もあるわけです。あるいは

「野蛮にあらゆる反抗者を屠殺してしまつた」というような言葉にあるように、いわば功罪二元論の立場に立っています。

それが六四年一月に毛沢東の詩が発売された。ちょうど歴史学界の中でも始皇帝評価があつたときに毛沢東の詩がたまたま発表になり、その中で毛沢東はかなり始皇帝を持ち上げているような気配があります。これは有名な例の「沁園春 雪」という、毛沢東の一九三六年の詩で、この中にまず第一に始皇帝を取り上げています。この詩についてはいろいろ論争がございまして、そこまで読むのは読み過ぎではないかと思うんですが、私はどうも、毛沢東は歴代の英雄をずっと並べて、結局、歴代の英雄は英雄ではあつたけれども文才に欠ける、現代の眞の英雄は自分である、ということをやつたつていゝるのではないかという、非常に低俗的な、通俗的な解釈にならざるを得ないんですけれども。

沁園春(第二十首)雪

—後段のみ—

江山如此多嬌

江山かくの如く多嬌なれば

引無數英雄競折腰

無数の英雄を引き競つて腰を折らしむ

惜 秦皇漢武

惜しむらくは秦皇も漢武も

略輸文采

すこしく文采にまけ

唐宗宋祖

唐宗も宋祖も

稍遜風騷

やや風騷におとる

一代天驕

一代の天驕

成吉思汗

成吉思汗も

只識彎弓射大雕

ただ弓をひきて大わしを射るをしろのみ

俱往矣

ともに往きぬ



## 数 風流人物

### 還看今朝

風流の人物を数えんには  
かえって今朝を見るべし  
(報告者の読み下しによる)

こういう詩の中に毛沢東の始皇帝像というものが出てきているような気がする。毛沢東というのは英雄豪傑が好きですからどうも始皇帝に対して、かなり共鳴するところを持っていたのではないかと思う。

三番目には、文化大革命の中に出てきます。これは未公開の毛沢東文選の中にあるんですが、林彪と論争したという、つまり焚書坑儒論争です。確か、始皇帝はあれだけのことをやったけれども、もっと激しいことをやるのだ、ということを書いてある。実は毛沢東は一九五八年の八全大会二回会議の発言の中にもこれをおおわせるようなことを言っているわけですし、そういう延長線上の毛沢東の始皇帝像というものがポツというふうに出てくるわけです。

その次に問題になったのは、例の「五七一工程紀要」の中の、林彪が書いたものといわれている、あの反革命陰謀の書の中で、いわば毛沢東を秦の始皇帝になぞらえて「マルクス・レーニン主義の衣をかぶった専制暴君である」とか、「毛沢東は現代の秦の始皇帝である」というようなことをいっている。

こういうふうになりますと、ここからどういう結論が引き出せるかというところ、まず第一に毛沢東が始皇帝にかなり共鳴するところを持っていて、あるいは憧れていたのではないかと、という仮説。二番目には、特に最後の「五七一工程紀要」というのは別に秘密文獻でもなくて、中国の中ではもう広範に流布されているわ

けですし、ここの中で、始皇帝は専制暴君だというふうなイメージが流布されている。流布されていることは毛沢東には困るはずなんですけれども、流布されているわけです。そうであるだけに、この流されている始皇帝像というものを転換する必要がある。そういうことからこの始皇帝礼賛運動が、どちらかというと文革グループによって行われている、というふうにみることできるのではないかと思う。

四番目には、言うまでもなく、始皇帝は万里の長城を築いたわけですから、北方の脅威の問題を考えても、始皇帝をいま称えることは非常に時宜に適っている。それからさっき言ったように、軍の中の問題も含めて、なかなか中央集権がうまく達成できないとするならば、臨戦態勢を強化するうえからも、あの戦国の小国であった秦が全国を統一して中央集権国家をつくったということ強調する必要がある。今回の始皇帝評価の中で強調されていることで特に中央集権国家をつくったという、あのことが非常に称えられているということは、やっぱり注目しているのではないかと思う。

さて次に、毛沢東と孔子の関係です。これも先入観をまじえずにちょっと調べてみました。そうすると、いま、たとえば林彪は孔子を取り上げたとか、劉少奇は孔子を引用したとかいうことが批判されていますが、毛沢東自身も「毛沢東選集」の中に孔子を引用しています。最も多いのは孟子で、孔子よりも孟子のほうが多いんですが、しかしながら論語についても引用しています。これもまたあたりまえのこととして、むしろ従来、マルクス主義と孔子思想との統一、前進——つまりそれを中国的に統一した毛沢

東を非常に称える人もあつたわけでして、これからしても当然な  
 んですけれども……。例の論語の巻頭の「学而時習之、不亦説  
 乎」というあの有名な言葉も、毛沢東はちゃんと自分の論文の中  
 に引用してあるわけです。

二番目には、「毛沢東思想万歳」という未公開文献を私は「中  
 央公論」に訳したんですが、この中に、毛沢東は文革のときに学  
 生と対話して、学生達が孔子を性急に批判するのを戒めている個  
 所がある。孔子は貧しい階級の出身であつたのだ、彼はただ学問  
 ができただけではなくて琴もひくことができたし、歌もうまかつ  
 たとか、そういうことをいまして、おまえ達は性急に孔子を批  
 判するけれども孔子は最後は確かに民衆から離れた存在になつた  
 が、頭から否定すべきではない——というようなことをいって、  
 はね上がり学生を戒めている。それから、だれが考えても孔子の  
 たまわく々という発想そのものが毛沢東語録と似ているではない  
 かということ。

こういうことからして、論理をたぐらずに一般論として考えて  
 みると、孔子批判、それは毛沢東を批判しているのではないかと  
 いうふうにも受けとめられるわけです。というのは、それほどま  
 でに、毛沢東自身も孔子というものと同じようにダブル・イメー  
 ジで、一方で始皇帝的なもの、つまり毛沢東というのは考えてみ  
 れば、彼の軍事思想や戦略、戦術をとると孫子であるとか、始皇  
 帝というものがイメーリアップされるが、彼のいわば倫理道徳主  
 義的な側面をとると孔子というところがイメーリアップされると  
 いう、そういういわば二重性を持つているわけだから、両方とも  
 いえるわけです。

しかしながら、どうも論理をたぐっていくとそういうことでは  
 ないように思う。そのへんは少し問題を提起したいわけです。ま  
 ず第一に、さきほど言つたように、反潮流といういまの新しい動  
 き、しかもその中でまさに造反有理という言葉と同じように、  
 「反潮流はマルクス・レーニン主義の一つの原則である」という  
 ような言葉が出てきている、そういう潮流が今後どれだけ拡大し  
 ていくだろうか。私はこの場合に王洪文というのはまさに反潮流  
 の鼓吹者としてクローズアップされてきたように思う。

そうしますと、一体潮流とは何か、ということなんです。どう  
 もそれがわからない。しかも潮流という言葉も、非常に意味を持  
 って使っている場合と、ただ一般的な形で使っている場合とある  
 ので、わからないんです。意味を持って使っている場合の潮流と  
 いうのは、どうもやはり脱文革的な新しい潮流、しかも林彪批判  
 を推進しているようなグループを指すように思われてならない。

そこでたくさん論文が読みきれないほど出ている中で、例の  
 少正卯殺害事件ですが、これはある意味で孔子が理論的に少  
 正卯を殺してしまったという、しかも殺された少正卯のほうが正  
 しかったという。

それから「呂氏春秋の編纂について」というような論文をみま  
 すと、呂不韋について、政治機構に頼って秦の荘襄王のいわば宰  
 相になった、というようなことをいうわけです。これなんかはど  
 うみても周恩来を指すのではないかという気がするんです。

それから、最近の「紅旗」十、十一、十二号の論文に全部共通  
 して出てくることはこれは——いちいち論文をあげませんが——  
 「秦王朝内部にもぐり込んで政府機関と文化部門を握つた」とい

うことです。これは共通して出てくる。政府機関と文化部門です。これなんかをみましてもやはりいまの行政官僚、それを代表する周恩来、というものが思い浮かべられるほうがむしろ当然ではないか。

同じようにこれらの論文に必ず出てくる言葉は「こういう者どもは世論をつくり上げた」と、「世論」について触れ、「世論をつくり上げる」ということを非常に強調している。一体これは何を意味するか。確かに今日の中国の中で全般的な世論としては脱文革のほうが大きな潮流になり得るのではないかと、という気がしますから、それに対してもう一べん文革の精神を、反潮流——つまりああいう事件を恐れずやらなければいけないという人達が、こういう論評を出しているのではないかと、というような気もするわけです。

ちなみに、この世論ということについては実は毛沢東もいっているわけです。六二年の八期中総会の中で、権力を奪取するにはまず世論をつくり出せ、というようなことを毛沢東もいっているわけで、それもいろいろ問題があるんですけども、そんなような気がするわけです。

さてそこで、こういういろいろな潮流をお話しますと、なにか大きな問題があるのではないかと気がいたします。それで七二年あたりからの、いわば文革的なトーンと脱文革的なトーンのもの、論文のリストをつくり始めていたのですが、きょうは時間がなくてシリ切れトンボになってしまいましたけれども、たとえば一昨年になりますけれども、七二年の紅旗第六号、田志松の「人民大衆こそ歴史の創造者でなければならぬ」。「英雄と奴隷がともに歴史を創造した」という議論に反駁する」という副題がついている論文です。これなどは、確かに林彪の英雄論とか天才論

を批判しているのですけれども、全体的にこのあたりから脱文革的な色彩が非常に強くなっています。それから七二年の十一号の雲嵐論文「思想の上から路線の是非を明確にしなければならぬ」。これは「人民日報」の七二年十一月二十八日に転載されたわけです。これはむしろ秦王朝を暴虐な王朝だというふうにいっているわけで、いまの始皇帝評価とは全く違うわけです。しかもこういうことをいっている。「文化大革命の中で地主、ブルジョア階級の古くなった、もう使いものにならない山の中から若干のデータメな資料を採り出してきて、幾千年もの階級闘争史を政変陰謀史に歪曲、仕上げようとする人々」と、これはまた非常にいまやっている孔子批判とか、始皇帝評価について、そうではないほうからの意見だ、というふうにも考えられる。

それから、七三年八号の黎堅論文の「上部構造の分野における革命を重視しよう」などをみますと、これなどはやはり同じようなことをいっているんです。これは「古い人のところからプロレタリア階級攻撃の武器を探し出し、歴史上の亡霊を呼び出してきて、その反革命復讐に奉仕させることはけしからん」ということをいっているわけです。

これらはある意味でいまの孔子批判とか、あるいは始皇帝評価の運動に対する批判だともいえるわけで、こういう潮流がやっぱり一方にあるわけです。

それに対して、七二年の「紅旗八号」紀平の「社会主義の時期における階級闘争の法則を掌握せよ」という論文、これは階級闘争を非常に強調しています。それで七三年「紅旗」第一号羊永銘の「決して階級闘争を忘れてはならない」という論文には、「平和とマヒ思想に陥って国際的な舞台における階級闘争を忘れている者がいる」と。それから七三年一月十四日付「人民日報」の「現

実主義深化を批判せよ」という論文、現実主義というレッテル——これは決して日本のレッテルではなくて——中国の中でも現実主義ということを行っている、ということですね。

そういうことが出ていて、それが孔子批判の楊榮國論文——楊榮國は、ご承知のように、昨年八月に例の孔子批判の論文の口火を切ったんですけれども、すでに一昨年にも論文を書いているわけです。こういういわば潮流があるわけです。こういうふうにかけてみると、十全大会というのは、潮流と反潮流なのか、とにかく二つの路線の闘いというものがいろいろ問題としてあったのだらう、ということはどうしても感ぜざるを得ないわけです。

#### ◇まとめとして◇

ただ、それが果たして具体的にどういう状況を意味するのかということ全般にみますと、孔子批判にしても、始皇帝再評価にしても、いろいろにとれるわけです。しかもこれは恐らく論争をやっている当人達がいまの段階ではいろいろの意味を含めて、一つ一つの言葉にもすごく注意をしているながら、だが同時に非常に複雑な立場から、いろいろな意味を含めて論争しているように思ふんです。ですから一般の民衆の側にとってみれば一体どういふふうになっているのかなかなかわからない、というのが実際ではないかと思う。

ただ、事実としていえることは、林彪事件以来、もうすでに二年近く経つわけですが、しかしながら依然として全国人民代表大会が開かれないでいます。しかもこれはほど中国が対ソ臨戦態勢を強化しようとしているにもかかわらず、軍の最高首脳を任命し得ないということなんです。この間の軍の異動でもついに国防部長、総参謀長以下、陸海空のいわば司令と思われるようなポストが空白

のままであるわけで、しかも全人代というのは、何回も予告されながら延ばされてきている。そこにいまの中国の中に非常に流動的な政治状況が反映していることは言うまでもないと思う。それを、さきほど私が申し上げた三つのプレッシャーが暫定的にこのバランスを支えているのだらうと思うし、しかもそれは毛沢東のカリスマ的な権威というものがやはり重しとしてのっているのだらうと思う。

しかしながら、そういう潮流の中で、たとえこれが周恩来に対する批判であつたとしても、現在の周恩来を失脚させることは、あるアメリカの学者がいつているように、「周恩来は中国の宝であらう。現時点でそれを失うことは中国としてできないのだ」というような状況があることも事実ですから、なかなかそこまで問題をすつきり出し得ないのではないか、というふうに考えざるを得ない。

それから、いくつかの論文をみてみますと、抽象的にはいざれも理屈が適うようなことをお互いに行っているわけですが、一体どういふふうに判断するかというのは読めば読むほどわからなくなるわけです。

ただ、そういう場合に、さっき言いましたように、論理をたぐれば、どうも脱文革なり、周恩来型の政治に対する批判の潮流というものが、最近第二文革の必要素となつていくつが出てきている。そこに今日の中国の政治における問題点があるわけで、いろいろすつきりしないんですけれども、このへんを十分みておくことが必要ではないかということなんです。

(本稿は昭和四十九年一月二十五日の研究委員会における報告である。文資Ⅱ編集部)